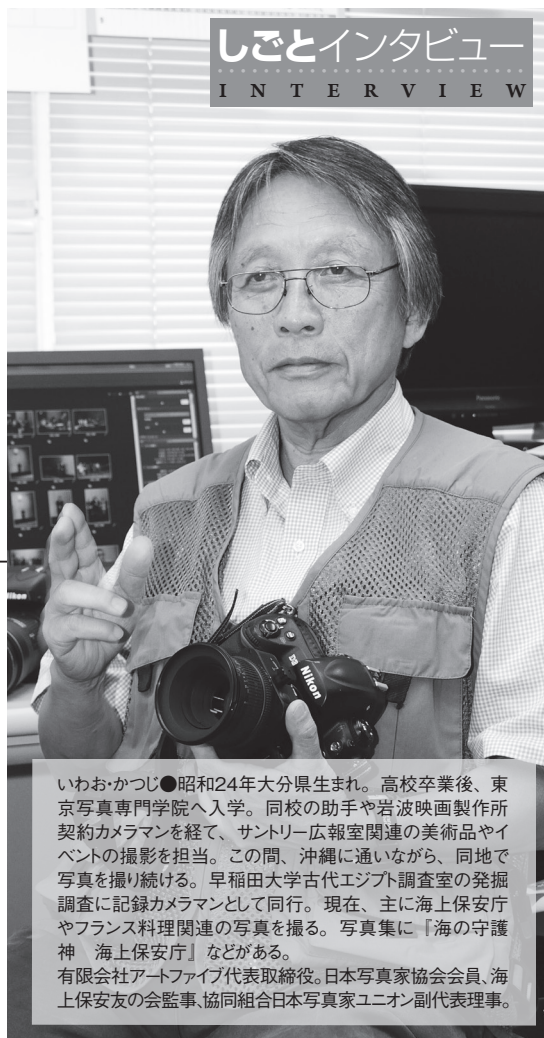


# さまざまな経験で培った 技術を作品に生かす

岩尾さんは、カメラマンとしてさまざまな分野の写真を撮ってきました。そこには常にカメラマンとしての技術を高める努力を怠らず、テーマとなる被写体を追い求める姿勢があります。

## カメラマン 岩尾克治さん



いわおかつじ ●昭和24年大分県生まれ。高校卒業後、東京写真専門学校へ入学。同校の助手や岩波映画製作所契約カメラマンを経て、サントリー-広報室関連の美術品やイベントの撮影を担当。この間、沖縄に通いながら、同地で写真を撮り続ける。早稲田大学古代エジプト調査室の発掘調査に記録カメラマンとして同行。現在、主に海上保安庁やフランス料理関連の写真を撮る。写真集に『海の守護神 海上保安庁』などがある。  
有限会社アートファイブ代表取締役。日本写真家協会会員、海上保安友の会監事、協同組合日本写真家ユニオン副代表理事。

### カメラマンになろうと決心し 写真の専門学校へ

——なぜカメラマンになろうと思われたのですか。

**岩尾** 高校卒業後、大学受験に失敗し郷里で暮らしていました。将来について考えようとしていた時期に、大学に進学した友人たちが郷里に帰ってきて、自分がかかわった学園紛争について語りだすのです。私はその姿を見ながら「あんなに必死に受験勉強をして大学に入ったのにどうして？」と思わざるを得ませんでした。

「大学に行ってもしかなかったがなにかもしれない。何か別な道を探そう」と考えるようになり、カメラマンになろうと決めて、東京の専門学校に入学した

のです。

——もともと写真に関心があったのですか。

**岩尾** 何かを表現してみたいという気持ちはありましたね。しかし写真への関心が強かったわけではありません。ただ、おじがカメラ好きだったり、写真が豊富に掲載された雑誌を読んでいた「こんな世界もあるんだ」と思ったりはしていました。また、オートフォーカスのコンパクトカメラを使っていた「写真っておもしろそう」という漠然とした思いはありました。そうしたことが無意識のうちに写真の世界へ進む素地をつくっていたのかもしれない。

写真というのはシャッターを押せば、後は化学反応でフィルムに像が残るので、今から始めてもそれほど才能やセンスは関係ないのではという思いもありました。

——専門学校に入学してからのことをお聞かせください。

**岩尾** 自分で写真の道に進もうと決めただけに専門学校時代は必死に勉強し、卒業後は母校の助手となりました。将来はここで講師として生徒たちに教えるという道もあったのですが、それは自分のやりたいこととは違うなと思っていました。それで1年ほどで学校を辞めて、沖縄に行ったのです。

沖縄は日本が抱える問題が凝縮されたような場所です。それだけに撮り

たいと思う被写体がたくさんある。私は政治的なテーマではなく、いろいろな問題を抱えながらも日常生活を送る人々に関心がありました。沖縄では、港湾や建設現場での労働、地元新聞社の暗室マンなど、いくつかの仕事の掛けもちして生活の糧を得ながら、写真を撮っていました。

### 組織のノウハウを自分に取り込む

——その後、記録映画や教育映画で有名な、岩波映画製作所で仕事をされるのですか。

**岩尾** 沖縄で知り合った方が紹介状を書いてくれ、契約サブカメラマンとして岩波映画で仕事をするようになりました。岩波映画では造船所や製鉄所など、重厚長大な産業施設を中心に写真を撮りました。自分がそれまで撮ってきたものとは全く違う被写体ですし、カメラや機材もあまり扱った経験がなかったものが多かったですね。空撮も経験しました。

岩波映画には4年ほど在籍し、その後サントリー広報部の仕事をしている会社の契約カメラマンとなりました。そこではサントリー美術館が所蔵する美術品、サントリーが主催するゴルフ大会やジャズフェスティバルなどのイベントの撮影を担当しました。

——かなり幅広い分野で活動されたの



▲フランス料理の写真も長く撮り続けている。



ですね。

**岩尾** そうした経験で培ったカメラ技術や機材の扱い方、人との交渉力などは今でもとても役に立っています。学校ではたくさんのお話を学ぶ必要があるけれど、それを仕事の中でどのように役立てていくかは、社会の中でいろいろな経験をしてはじめて身につくものだと思います。会社という組織の内部にはいろいろな技術やノウハウが詰まっています。それを自分の中に取り入れ、身につけるためには必死に努力するほかありません。

一方で私は沖繩へ何度も足を運び、写真を撮り続けました。そして銀座ニコンサロンで「沖繩の混血児はいま」という私にとってはじめての写真展を開きました。

**ライフワークと出会えた幸せ**

——ずっと海上保安庁に関連する撮影をされていらっしゃいますね。

**岩尾** もう40年近くになります。最初に取材に伺ったのは、現在の対馬海上保安部でした。海上保安庁の職員が数人で違反船に飛び移るなど、命がけで仕事をしていると知って衝撃を受け、その仕事を多くの人に伝えたいと強く思いました。そして常時連絡できる場所をもたなければと考え、事務所を開設しました。

当初は船長やヘリのパイロットに何

をどのように伝えて撮影したらよいか、何もわかりませんでした。それでもしばらく取材に通っているうちに撮影のポイントがわかるようになり、現在まで続けています。自分の撮影技術が生きるテーマと出会い、ライフワークと呼べるようになったことはとても幸せです。

——ピラミッドなどの発掘調査隊に同行されたとうかがいましたが…。

**岩尾** 早稲田大学の古代エジプト発掘調査隊に同行し、撮影しました。1年のうち1カ月ほどエジプトに滞在するというのが5年あまり続きました。世界各地の大学からも発掘調査隊が来ており、その成果を発表する際にどれだけいい写真を掲載するか、競争しているような状態でした。そうした中で自分は世界を相手にしていると実感しましたし、いい写真が撮れたと自負しています。

——お仕事ではどんなことを心がけていらっしゃいますか。

**岩尾** 現場に行ったときに、すでに仕事はほとんど終わっているものだと思います。つまり現場に行く前にさまざまなシチュエーションを想定し、できる限り細かくシミュレーションをするわけです。もちろん現場はシミュレーション通りに進むわけではありません。しかし、しっかりシミュレーションをすれば、何か問題が起きても素早く適切に対処できます。

——クライアントからの依頼と自分が撮りたいものとの間にギャップがあつて、悩んでしまうことはありますか。またギャランティについてはどのようにお考えですか。

**岩尾** 私の場合、自分で企画を立ててスポンサーを説得することが多いので、そのようなギャップはほとんど感じることがありません。内容にかかわらずギャランティの安さをアピールして仕事を得るといふやり方もあるかもしれませんが、私はそうしたことをしなくてもいいです。自分の技術や写真のセンスを正當に評価していただけるように努めています。そうして相手から信頼を得たほうが、仕事も安定すると思いますね。

——カメラマンを目指す若い人たちにメッセージをお願いします。

**岩尾** まず自分の特性がどこにあるかを知ることが大切です。そしてそれを知ったら、あきらめずにがんばること。そうすれば自然と自分の進むべき方向性が示されると思うのです。また、世界を相手に仕事をしてほしいと思っています。そうすることでカメラマンとして得られるものもとても大きい。実際、日本の写真マーケットは決して広くはないので、世界を相手にすることで、カメラマンとしてだけでなく、写真作家などカメラを使って作品をつくる職業の可能性も広がるはずですよ。